

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実  
—持続可能な社会の創り手の育成と

日本社会に根差したウェルビーイングの向上を目指して—

新渡戸文化中学校・高等学校

代表 高橋 伸明

## 1. 本校の特徴と研究テーマ設定の理由

令和5年6月「第4期教育振興基本計画」が閣議決定された。2つのコンセプトとして「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が掲げられている。本校では、これより前から、「自律型学習者」を育成し、「Happiness Creator」となることを目指している。社会課題や個人が抱える問題の解決という視点から、自分たちの明日を行動によってつくっていく未来創造できる人を育てている。そのためには「学びと社会が繋がること」が必要である。これは初代校長である新渡戸稲造氏が残した「『学俗接近』、つまり学問と実社会を結びつける教育を目指したい」との言葉にあらわされる理念にも通じる。文科省が掲げるように「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実についても、ICT機器も併用し、対話を重ねながら新聞活用を試みることで、達成されるのではないか。そして、結果的に「持続可能な社会の創り手」に生徒が成長していることが理想である。この達成には、新聞を活用した教育が有用であると考えた。新聞は社会に存在する現象や問題をうつし出す鏡であり、過去や現在から未来を予測する材料や生徒の学びと社会を結ぶ架け橋に新聞が成り得るのではないか。新聞による学びによ

り、生徒の非認知能力やコンピテンシーが向上されるのではないかと、その結果、生徒も新聞の有用性に気がつき、活用し続けようとするのではないかと仮説づけ、実践を重ねた。

## 2. 実践の内容

主題に関しては個人と協働的な学びを意識したNIEを実践した。また、事後アンケートを実施し、本校が掲げる「コンピテンシー」と「ハピネスマインド」の向上を測り、副題への達成を検討することとした。

以下の通り、複数の学年、活動で試みた。

### 2.1 高1 LHR

#### 5/14「問いづくりワークショップ」

コースを融合したグループワークを実施した。目的は、①「理想」の構想、②「問題・困難」の把握、③「解決」という仮説の思考のプロセスを辿ることである。仲間との対話を重ねながら、ブロックを使用して表現し、動画で共有した。新聞を読む前の素地となる思考の視点やプロセスの獲得を意図した。

### 2.2 高1 授業「現代の国語」

#### 2.2.1 7/1 アウトプット型テスト

朝日中高生新聞デジタルを活用した1分間スピーチを行った。テーマは「自分の『興味・関心』を共有して、見方・考え方を広げよう！」である。発表者は、①選んだ記事、

②なぜその記事を選んだか、③記事の説明、④記事を読んで考えたこと・今後のアクション、⑤聴衆へのメッセージ・問いかけについて述べた。聴衆は、ループリックに沿った評価とポジティブフィードバックをタブレット端末にてリアルタイムで入力した。

### 2.2.2 2学期 初回授業「第16回 いっしょに読もう！新聞コンクール」応募

授業開始までの期間、廊下に新聞と過去の最優秀賞作品を設置し、初回授業に2学期のエンゲージとして実施した。記事の選択・添付と「①記事を選択した理由と考え」を記入した状態で授業に臨み、クラスメイトと対話した後で、応募用紙の②、③を記入した。

### 2.2.3 10/25 公開授業 探究の経過・成果を新聞形式で表現

「わたしの探究—この半年で、何に気づき、どう行動したのか—」と題し、入学から半年に及ぶ各コース(探究・美術・フード)の学びを新聞形式にまとめ、一般来場者に発表した。新聞の作成に当たっては、産経新聞社の「かんたん号外くん」を使用した。当日はPadletを用い、リアルタイムに参加者よりコメントが書き込まれた。

### 2.2.4 11/4～スピーチ原稿作成

教科書の単元「確かな情報を伝える『パブリックスピーチをしよう』」に連動し、デジタル新聞から記事を選び、原稿を作成した。生徒は自らキーワードを設定し「言葉の定義」、「事象」、「問題点」、「有識者の引用」、「考察」、「自分の考え」を記述した。

### 2.2.5 12月アウトプット型テスト

上記した、お互いの原稿をロイロノートで共有し、Google フォームでリアルタイムに評価・コメントした。

### 2.2.6 3学期 授業「2026年 日本『未来』予想」(全2回)

3学期のエンゲージとして、2025年の社会・個人ニュースを振り返り、日本経済新聞社が2025年をまとめた「【The Moment2025】写真が切り取った100の瞬間」を視聴した。「興味・関心」、「普段全く興味のないこと」、「トレンド、重要・注目」の3つの視点を生徒ごとに設定し、「日経電子版」を使用して記事を選択した。生成AIを活用した機能である「Ask! NIKKEI」も使用しながら理解を深め、キーワードを抽出しながら、3つの視点による2026年の日本における未来を予想し、ロイロノートで作成・共有した。

### 2.3 高1 朝活動「News Project」

「News Project」と題し、3つのコース(探究・美術・フード)が、融合してチームを組み、継続的な活動が行われた。

#### 2.3.1 2学期(9/8～12/1(全11回))

「未来を創造するためのプロジェクト構想」を目的として、6名で「未来に残したくないもの」、「未来に残したいもの」、「高校生レベルでできること」の3つの視点で考えるところからスタートした。記事と考えは、AIイノベーション ワークスペース「Miro」に集約し、最終的なプロジェクト構想は、発表動画として画面収録して共有した。

#### 2.3.2 3学期(1/19～2/16「2026年 日本『未来』予想」(全4回))

授業「現代の国語」でエンゲージとして行ったものを、3名でチームを組み、お互いの「興味・関心」を掛け合わせた3観点から、2026年の日本における未来を改めて予想し、ロイロノートで作成・共有した。

## 2.4 高2 選択授業「文章演習Ⅰ」

### 2.4.1 教科書との連動と自作教材の活用

「生活・社会」から「医療・看護」の10テーマから構成される教科書と、「事実」、「考え」、「問い」、「結論」からなる「インプットシート」(オリジナル教材)を併用した。毎週異なるテーマに沿って、生徒は紙の新聞から記事を取捨選択し、インプットシートを記入して、発表スライドを作成した。

### 2.4.2 5/24～(通年)毎回の発表と質疑応答

毎回4～5分程度の発表の後、クラスメイトによる質疑・応答により、考えを深めた。Padletも使用しながら、生徒は「★評価」、「○感想や褒め出し」、「●疑問」を記入した。毎テーマごとに大学入試の過去問題に取り組み、ロイロノートで解答を共有した。

### 2.4.3 2学期 初回授業「第16回 いっしょに読もう！新聞コンクール」応募

初回授業(2コマ連続)に、2学期のエンゲージとして実施した。1コマ目に記事の選択と「①記事を選択した理由と考え」を記入し、2コマ目にクラスメイトと対話した後で、応募用紙の②、③を記入した。

### 2.4.4 11/22 Open Day(公開授業)

「学習者の興味・関心を引き出す・生徒主体の授業のヒント」を目的としたOpen Dayで上記した授業を公開した。Padletは一般参加者にも公開し、発表スライドの共有とリアルタイムなフィードバックを可能にした。授業後は、授業者と参加者によるグループディスカッションを行った。

## 2.5 高3 選択授業「文章演習Ⅱ」投書

「文章演習Ⅰ」で上記した授業を高2で受講した高3が、3学期のまとめとして、自分の考えをまとめ、授業者だけではなく、記者

によるプロの目を通した社会的な評価による判断を仰ぐことを目的に、「投書」に挑戦した。生徒それぞれがテーマを設定し、根拠を明らかにしながら、自分の考えを記した。

## 2.6 高1～3 選択講習(長期休業中)

### 2.6.1 7/22-23 夏期講習「新聞記事から探究テーマを設定し、問いとアクションを考えよう！」

異学年3名でチームを組んで行った。1日目は、「未来(2030年)に残したくないもの」を探究テーマとし、SDGsの17のゴールから3つ当てはまることを条件に、「問い」と「アクション」を考えた。2日目は、チーム毎に設定した探究テーマに対して「私たちにできることは」という視点から「プロジェクト活動」を構想し、取り上げた記事と関連させながら「プロジェクト名」、「目的」、「活動内容」について発表して共有した。

### 2.6.2 12/22-24 冬期講習「来年(2026)の『経済』予想をしよう！」

「経済」という生徒にとって難しさを感じる分野に対して、「お金」、「企業」、「IT」、「国際」などの切り口から、日経電子版を使用して考えをまとめた。最終日には、考えのものもとになった記事と合わせて共有した。

## 2.7 高2 生徒プロジェクト「3.11 福島再生プロジェクト」

「文章演習Ⅰ」の受講者2名により生徒を主体とした「プロジェクト」が生まれた。入学前より防災グッズに関心のあった生徒が、高1秋に訪れた福島スタディツアーと、高2「文章演習Ⅰ」での新聞活用学習をきっかけとして、「福島の被災について探究し、防災に向けてアクションを起こしたい」との意識が生まれ、プロジェクト発足に至った。以下

のような継続した活動を経て、現在は防災グッズの商品化に向けて企業共創している。

- ・7/12 「NIE 生徒研究発表会」プレ大会  
(日本 NIE 学会企画委員会)出場
- ・7/14 プロジェクト計画作成  
「福島民報」へ生徒による取材依頼
- ・8/6 ニュースパーク(新聞博物館)見学  
「新博キット」申し込み  
国立国会図書館を訪れ、記事を複写
- ・8/22 「福島民報」オンライン取材  
「新博キット」の新聞記事を分析
- ・9/8 朝活動 高1全体に活動説明
- ・10/11 文化祭でのポスター発表
- ・11/1 中高生みらい教育サミット発表
- ・11/29 高校学校説明会での活動発表
- ・12/6 ユネスコスクール全国大会での  
ポスター発表
- ・12/21 超文化祭でのポスター発表、  
ドネーションプレゼンテーション

## 2.8 高3 生徒プロジェクト「未来の教育構想プロジェクト」

テーマ「新聞から未来の教育の在り方を考える」で24年に「生徒研究発表会」で優秀研究賞を受賞したプロジェクトメンバーが、「生徒主体で新聞を活用した探究発表とつながりが生まれる場」を目的とした「中高生みらい教育サミット」を企画した。東京都NIE推進協議会の後援を得て、11月1日にオンライン開催した。

## 2.9 卒業生(大1) 学生プロジェクト

テーマ「トー横キッズが『自律』から『自立』できる社会へ」で23年に「生徒研究発表会」で優秀研究賞を受賞したプロジェクトメンバーが、7月26日の高校説明会で、プロジェクト内容を受験生などに発表した。

## 3. 実践の成果

### 3.1 新聞の教材としての有用性

これまで述べてきたように、異学年での多くの教育活動において新聞を活用してきた。主題である「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実においても、生徒が自らの関心に応じて記事を取捨選択しながら学習が進められるという点と、記事に関わる対話や発表などの相互交流において資質・能力を育成できる点で、大変有用であった。生徒アンケートからもNIE後に「よく利用するようになったメディア」のTOP3に「新聞(電子版)」が挙げられた。

### 3.2 生徒の変容

副題「持続可能な社会の創り手の育成と日本社会に根差したウェルビーイングの向上」に対しても、事後アンケート結果から生徒の「コンピテンシー」ならびに「ハピネスマインド」の数値結果により向上が見られた。

また、NIEをきっかけに生徒が主体となり社会に対して具体的なアクションをするプロジェクトの発足も毎年見られている。生徒の意識変容だけではなく行動変容にまで至った結果であると考えることができる。

## 4. 課題 新聞を継続して読む意識の低さ

事後アンケート項目「今後も、新聞(デジタル含む)を、読んでいこうと思いますか」に対し約3割の生徒が「いいえ」と答えた。SNSでの短文や写真、動画共有サイトでの動画視聴に慣れた生徒からは、「文章が長い」、「面倒に感じる」という声が挙がった。

今後も、新聞としての情報の信頼性を強調しながら、紙面の一覧性、デジタルの利便性を活かしたNIEを意識し展開していきたい。